地方自治ここにあり　首長インタビュー

町民とともに、子育て支援県下一、小さくてもキラリと光るまちをめざして

紀美野町長　小川裕康さん

小川紀美野町長

7月30日、紀美野町小川裕康町長を九鬼、大前で訪ねました。紀美野町は平成18年に旧美里町と旧野上町が合併し、人口約7，800人、4，000世帯のまちで、中央を東西に貴志川が流れる自然豊かな美しいまちです。

大前：紀美野町長のインタビューは、14年前の寺本町長2期目の時に来させていただきました。寺本町政のあとを引き継ぎ、町長になられて3年、この間に町長として大事にされてきたことは。

町長：私は旧の野上町役場で合併まで総務課長を3年、合併後は寺本町長の下で副町長をさせていただきました。令和3年に寺本前町長の突然のご逝去を受けて、自分が生まれ育ててもらった紀美野町を少しでもいい町にしたい。町民の皆さんが、住んでよかったと思える町にしていきたいと町長選に立候補させていただきました。

私のスローガンは「町民の皆さんとともに」です。町内各地域で開催されるイベントや地域の伝統行事に参加し、皆さんと交流する。そして笑顔あふれる町づくり、小さい町ですがキラリと光るまちをめざしています。

地域に新しい風が吹く　一方で、人口減が進むまち

大前：紀美野町は、都市部からの移住が盛んで、新しいお店が増えて地域に活気があり、新しい雰囲気があります。しかしもう一方では、4月に発表された消滅可能性自治体とも言われましたが、その辺は町長、どうお考えでしょうか。

町長：少子化は紀美野町だけでなく、全国的な大きな課題です。紀美野町でも子どもの生まれる数が減少する一方で、高齢で亡くなる方が増加し、人口の自然減が大きい。しかし移住などで転入されるなど人口の社会増減はとんとんくらいです。

九鬼：移住される方がやはり多いのですね。

町長：町内で子育てをしやすいように、子育て支援策を積極的に実施し、少しでも子どもが増えれば自然減を少なくし、人口の減少が緩やかになると思っています。

移住・定住支援には、早くから取り組んできました。平成18年に「定住を支援する会」が発足しました。これまでに107世帯205人の方が移住されています。

平成18年に和歌山県が団塊の世代をターゲットに移住に力を入れるということで、5町がモデル町に指定され、当町もその一つでした。移住施策をすすめる中で、団塊の世代だけでなく若い世代も増えて、紀美野町で子どもを産みたい、育てたいと思って来られた方もいらっしゃいます。

また、地域おこし協力隊員は、これまで23名を委嘱しました。いろいろなミッションがあり、各地区のまちおこし活動や移住定住に関わる支援、民泊推進、きみの地域づくり学校運営など、また昨年から推進している自伐型林業に4人の方に来ていただいています。そういった方々が、町に新しい風を吹き込んできてくれています。これまでの地域おこし協力隊の方たちの多く

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2024年9月号
2024年8月25日発行　第361号　（月400円）

目　次

地方自治ここにあり　首長インタビュー
町民とともに、子育て支援県下一、小さくてもキラリと光るまちをめざして
紀美野町長　小川　裕康さん…… 1
かつらぎ町新城
山村留学の歴史から、新たな地域振興を「新城BASE」を拠点に模索する。
「新城BASE」代表　戸田　真寿さん…… 6
第66回自治体学校in神奈川
公共を取り戻すことの重要性を改めて考えました
和歌山市水道労組　伊藤　一三さん…… 8
県下各地から⑨
「産業廃棄物発電」計画への反対運動強まる …… 8

は、卒隊後も紀美野町で定住され、カフェや民泊等を経営されています。

協力隊員が中心となりサポーターと進める中田の棚田再生プロジェクト

大前：私も2年前に中田の棚田再生事業に来られた地域おこし協力隊の方にお会いしました。また、昨年「きみの地域づくり学校」で地域おこし協力隊の方にお世話になりました。

町長：中田の棚田は、６００年の歴史のある棚田で、「まちづくり推進協議会」で、「棚田の再生」という案が出され、令和元年に活動が始まりました。その年に棚田地域振興法が制定されて指定棚田地域に指定されました。今年で6年目となります。町では棚田担当職員が和歌山大学大学院に入学し1年間、全国の棚田再生の勉強をしました。また、地域おこし協力隊を入れて進めているところです。

大前：私も見に行きましたが、規模も大きく壮観な棚田で、高野領で歴史のある棚田なのですね。

町長：あの辺はもと高野領で、記録も残っていて、米をつくって上納していたという歴史があります。小川地域棚田振興協議会の会員は30人弱ですが、ボランティア、サポーターの皆さんが協力してくれ、今年の田植えは6月1日、2日の土日で、２５０人を超える方が協力してくれました。

九鬼：サポーターは地域外からも来てくれるのですか。

町長：中学生、海南高校の野球部の皆さん、和歌山大学の学生さん、もちろん一般の方も、県外からも来られる方が大勢います。そこでは関係人口づくりが進んでいます。

大前：2年前は、一部しか田に復元されてなかったのですがだいぶん進みましたか。

町長：現地の様子が随分形が変わってきました。草刈りから始めて、大きな木の根を掘り返して田に戻して、去年は米を１０００キロ位収穫できたと聞いています。去年は、7アール、今年は12アールぐらいを耕作しているということです。

九鬼：棚田を耕作していた人はどうしているのですか、集落の人たちは、どっかへ転出したとか。

町長：いえ、いらっしゃいますが、高齢で耕作できなくなってきたということです。

九鬼：放棄地になっていたということですね。

町長：令和元年度に始めた頃には2人の方が耕作されていましたが、今は1人になっています。棚田の面積は約10ヘクタールあります。

空き家対策と移住定住の取り組み

九鬼：移住者に対する補助とかはどんな制度がありますか。

町長：移住者の方に対する補助金は、家のリフォームに２／３補助で上限１００万円の空き家リノベーション補助金。それに県の補助金１００万円を合わせて最大２００万円の補助金が受けられます。また、今年から現地訪問などの相談者に交通費の半額補助。相続登記ができていない場合に相続登記費用の半分を補助します。もう一つは、町が空き家を借り受け、町がリフォームして住めるような状態にして、移住者に貸し出す事業を、今年から始めました。

九鬼：以前寺本町長にお話を聞いた時には、和歌山大学の協力で空き家調査をやられたと聞いたのですが。

町長：和歌山大学のシステム工学部の先生が10数年前から６回もやってくれています。なので、全町内の空き家を調査してくれて、どの地区に何軒あるというのは把握できています。大変重要で貴重な資料です。

大前：空き家はあるけど、なかなか貸してくれないと、どの地域でも聞くのですが。

町長：一番大きいのは仏壇のことです。次には、住めるようにするには費用が掛かりすぎて断念するケースがあります。紀美野町に実家があって仏壇を置いてあり、子どもさんたちはたまに来られて拝んでいる。そういう場合でも話が進む場合もありますが。

九鬼：どこの市町村でも、空き家問題で苦労していますが、紀美野はかなり前から、対策を進めてきた積み重ねがありますね。

町長：そうです。まちづくり課が担当で、移住施策は職員と集落支援員2人の態勢です。移住相談のワンストップパーソンと集落支援員の2人が、大変親身になって、いろいろとやってくれています。移住された方の話によれば、対応する人がどれだけ親身になって相談に応じて空き家を案内するかが、移住先を決める決め手になるようです。

大前：ここには移住者の団体があると聞きましたが。

町長：「NPO法人きみの定住を支援する会」です。いろんな移住のお世話もするし、移住されてきた方々の親睦を図る交流会を毎年やっていて、60、70人が家族で来られます。移住者同士の交流は大事で困り事とかを話しやすいと聞いています。コロナのときはできなかったのですが、去年から復活しました。私達も参加して、いろんな方と話をする中で困りごとなどの声も聞きます。できるだけ、出かけて行って直接話をするのがいいと思っています。

小川地区の中田の棚田

九鬼：何年か前に和歌山県で一番住みたいまちが紀美野町だと言われたと思うのですが、その背景が、こうした住民の声や移住者の声を直接反映するというのもあるのでしょうね。

町長：そうでしょうね。また、紀美野町へ住みたいけど、すぐに家が決まらない方には、４戸ある短期滞在施設に住んでもらって、利用期間１年間の間で住みたい家を探してもらい、気に入った家をリフォームされる方が多くいます。

九鬼：移住者の方は、現役世代の方が多いのですか。

町長：いろいろですね。小さい子どもさんのいる家庭とか、３月に退職して４月から来られた人とか、いろいろな年齢の人がいます。

九鬼：仕事や生活手段というのも大事になると思うのですが。

町長：紀美野町でも平成26年に、町内どこでも光回線が通じる環境にしました。山間部でパソコンで仕事される方もいるし、もちろん和歌山市内に勤める方もいらっしゃいます。農業を始める人もいますが、農業だけでは生活が難しいので、半農半Ｘとか半林半Ｘとか、農閑期に他の仕事を手伝ったり、民泊経営の傍ら、農業の手伝いにいくとか、いろいろです。移住で一番大事なのは住むところです。仕事は条件を選ばなければあるようです。それから、紀美野町にはお洒落なお店が増えてきているので、そこでお手伝いする人もいますね。

自伐型林業推進で林業の再生を、農業振興は山椒づくりを推進

大前：先ほど自伐型林業の話もされていましたが、昨年開催された自伐型林業の紀美野研修会をユーチューブで見ましたが。自伐型林業での地域おこし協力隊の方は何人いるのですか。

町長：去年から２人、今年２人で４人です。ただ、もともと林業家ではないから、山を貸していただき、木を切る練習、訓練とかをやっています。協力隊員としての３年間に、しっかりと勉強して卒隊したあとに、自分で起業することを考えてもらいたいです。

大前：龍神の林業家の方に自伐型林業の話を聞きましたが、理念は素晴らしいのだけども、経営していくとなると、大変だという話もされていました。

町長：もともと紀美野町には、20年前から、自伐林家の方もいるのです。広大な山を持っていて、冬の間に木を切って、木材市場へ持って行き、それ以外のときは、農業とかいろんなことをされています。林業だけで生計を立てるのは難しいですが、林業をしながら生活をすることは可能と聞いています。

森林環境譲与税は、今年度で３６００万円位です。それをうまく活用して、林業家を増やしていきたいと考えています。

自伐型林業というのは小規模な林業で、山を管理する林道も小さく壊れにくい林道をつけていくということで、山林をしっかりと管理し、災害から町を守るという面があります。伐採も皆伐でなくて木を選んで少しずつ切っていく。皆伐すれば土砂、水害の恐れも高くなるけども、２割ぐらいの伐採ならばそれは大丈夫みたいです。

大前：紀美野町の農業や農産物といえばどんなものがありますか。

町長：農業は、もちろん米もつくっていますが、柿とみかんと柚子と、山椒なんかも人気があって、値段もいいみたいです。

九鬼：ぶどう山椒ですか。

町長：そうです。今は、海外にも出荷されています。山椒はジャパニーズペッパーと言われています。当町では約50軒の農家が栽培されており、売れ行きも好調のようです。新たに植えようという方も多く、苗が入らないほど人気が出てきました。２年前から山椒苗木の購入に町から補助金を出して推進しています。山椒は、実がなるまでには５年位かかり、20年から30年で植え替えなければなりません。

大前：山椒やみかん、柿は以前からの産地でしょうか。

町長：そうです。柿は旧美里の方で栽培が多く、美味しいですよ。

道路整備や交通弱者の交通政策、「きみのり」について

大前：国道３７０号の整備が進み、海南から高野山に行くのが走りやすくなっています。整備はほとんど終わったのですか。

町長：国吉地区から毛原地区へ通じる国吉毛原トンネルが２年前に供用開始され、現在はトンネルの前後の拡張工事を進めてくれています。また、かつらぎ町新城地内の国道３７０号の改修が始まります。それが出来れば高野山までの時間がもっと短縮されます。かつらぎ町から高野山へ上り、帰りは紀美野町へ回ってこられる仕掛けを創っています。

九鬼：旧美里町と旧野上が合併して18年ですが、地域間格差というか、美里の方がやはり衰退が厳しいと思のですが、住民から意見は上がってきていませんか。

町長：人口の減り方は、旧の美里地区の方が旧野上地区より多いと思います。格差かは、行政の中では全くないし、旧の美里地区の国道も良くなって、行き来しやすいし、例えば、交通の問題で買物とかでも、コミュニティバスを運行しています。新たに、高齢者のタクシー券でバスやタクシーで利用出来る補助制度も始めました。また、一番東の長谷毛原地区では診療所への送迎サービスや、「きみのり」という車が２台あります。その車を地域の方々がボランティアで運転して高齢者を買い物などに送迎してくれています。

九鬼：「きみのり」というのは、

どんな仕組みで運行されているのですか。

町長：長谷毛原地区のまちおこし団体「元気長谷毛原会」が運営されています。車はトヨタのモビリティ基金から町が贈呈を受け、それを無償で貸与しています。ボランティアの運転手が、週１回貴志川や橋本方面へ買物に行きます。経費の一部は介護保険の移送サービスを使っています。ガソリン代程度は、利用者に負担してもらってるようです。

九鬼：乗り降りの介助とかをしている。

町長：地域の方々17人がボランティアで運転手を引き受けてくれて、その方々が介助もしてくれていると思います。

九鬼：これは、美里の方だけですか。

町長：はい。紀美野町の長谷毛原地域です。

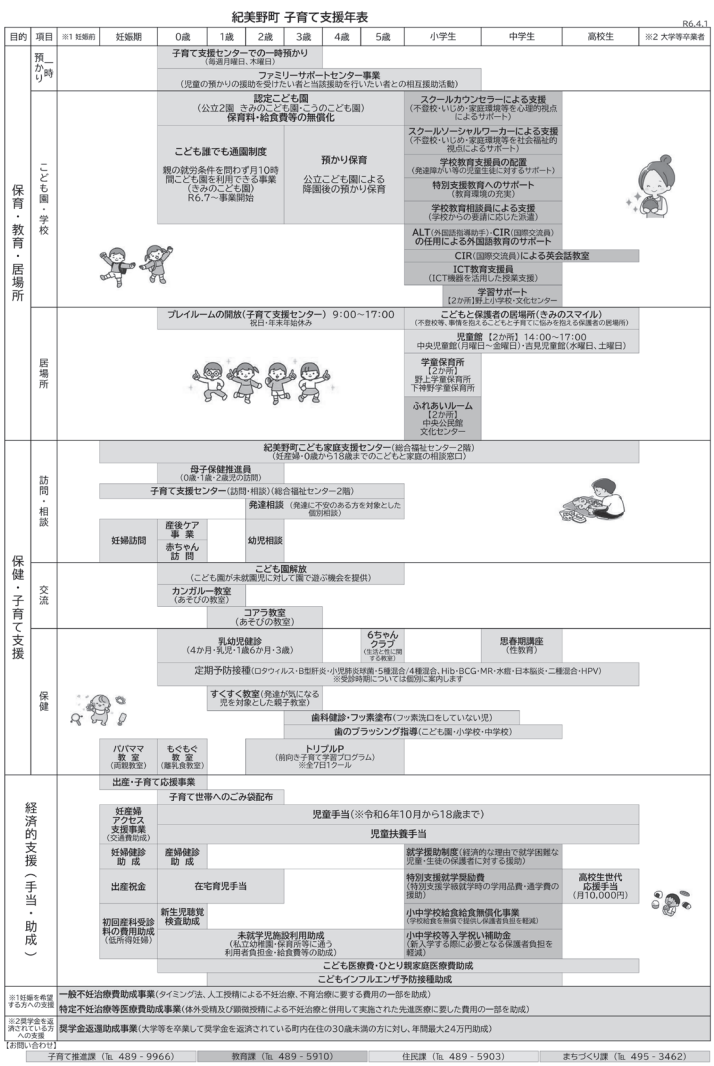
大前：それ以外に、タクシー券の補助と、診療所の送迎ですか。

町長：長谷毛原地区と国吉地区に、へき地診療所があり、通院は片道２００円でタクシー会社が送迎してくれています。家からドアツードアで診療所まで行けます。

大前：高齢者のタクシー券というのは、どんな制度ですか。

町長：チケットになっていて年間１８，０００円分を支給します。交付対象者は75歳以上の世帯の方と、65歳以上で免許を持っていない方や免許返納者、障害のある方か、妊婦さんも対象にしていましたが、今年度から国と県が妊婦さんの制度をつくってくれています。

大前：交通対策はコミュニティバスをメインに幾つか補完的にやられているのですね。



子育て支援年表（紀美野町ＨＰより）

町長：コミュニティバスが中心ですが、バスは幹線道路しか走れないので、歩くのが不自由な方には、タクシー券を使ってもらえるようにしています。

子育て支援 県下一を目指して

大前：子育て支援についてお聞きしたいのですが。

町長：子育て支援県下一を目指して、令和４年３月に「紀美野町子ども子育て応援宣言」をしました。それで全庁的な組織である子育て支援推進本部を立ち上げ、支援策の協議を行いました。支援は妊娠前から始め、大学を卒業し、町内で住まいをされている30歳の方まで支援策を設けました。

子育て支援策はいろいろあるので、それを見やすいように、年表にまとめました。妊娠前から、最終、大学卒業後まで分類しました。例えば０歳であればどんなサービスが受けられるか、小学校へ上がればどんなサービスが受けられるのか、保護者の方にわかってもらいやすくしました。

大前：手続の漏れがないようにというか。

町長：そうですね。子どもが１人目は10万円、２人目以降なら20万円のお祝い金。小学校入学には５万円、中学校入学は８万円のお祝い金。もちろん18歳までの医療費の無償化や、こども園での給食や保育料の無償化、小中学校の給食も無償化にして、児童手当は、中学３年生までしたので、町単独で新たに去年から高校生に対して、通学を支援するために高校生世代応援手当をつくりました。

大前：通学の手当を。

町長：高校生世代を支援するということで、月１万円でそれは何に使っても良い。高校生になったら全然支援がなくなるので、去年から応援手当をつくりました。

住民自らがまちづくり「まちづくり推進協議会」

九鬼：「まちづくり推進協議会」というのは、町全体なのですか。

町長：全体です。合併後、間もなくして発足し、以後ずっと継続され進化を遂げてきています。会員は61人。全体の会もあるし、ブランドづくり部会、美しい郷づくり部会、紀美野史発見部会という３つ

の部があって、それぞれに分かれて活動されています。今年度からは、子育て世代に向けた活動も始まっています。

九鬼：いろんなことを相談して、こういうことをしてほしいとか要望などがあれば、町との関係ではどうなるのですか。

町長：協議会に対して町からも補助金を出して、事務局もまちづくり課が担当しています。そこで、いろんな事業を協議会で創設してやってくれています。町は後方支援をしています。

九鬼：メンバーの年代層はどんな方ですか。

町長：メンバーは、結構幅があります。30代の若い人から上は70代の人がいます。

豪雨災害の復旧状況は

大前：昨年６月２日の豪雨災害の復興は順調に進んでいるのですか。

町長：私達も全く初めての経験で、３時間で１４０ミリの豪雨は経験もないし、川の水位も１時間で２メーターぐらい上がりました。お１人の方が濁流に流されてまだ発見できていない。本当に残念なことです。床上、床下浸水含めて建物の被害は１５０件ぐらいあり、町営住宅で避難生活をされた方もいました。今回初めて社協にお願いしてボランティアセンターを立ち上げていただきました。発災の３日後の５日には、ボランティアセンターが立ち上がり、県内外から約４００名、他に職業ボランティアの方も約４００名、合わせて８００名を超える方々が応援に来てくれて、家の中の泥出しやゴミ出しをしてくれました。外へ出されたゴミや泥は町が運搬し、うまく分担ができて、スムーズに復旧が進んだ部分がありました。

公共の復旧事業は件数が多いので、まだまだ継続中です。特に河川や道路の被災が多く、５００件ぐらいあったと思います。今工事中のもあるし、まだ着工できてないところもあります。

職員にも依拠して消滅可能性自治体からのチャレンジ

大前：和歌山大学へ職員を、勉強に出したり、「きみの地域づくり学校」とか、地域おこし協力隊をいち早く導入したり、新しいことにチャレンジされている職員さんも多いように思いましたが、秘訣はどうなのでしょう。

町長：アンテナを高く上げ、これはいいと思ったものはすぐに検討する。職員間の風通しも良くないとだめです。職員がいろいろ、考え、見て勉強してきたことを取り入れたらいいと思っています。人口も８０００人を切って、「消滅可能性市町村」とか言われていますが、今年の町政報告会でも「テレビで消滅可能性とか言うけど、うちの町がなくなるのか」と言われました。私は、「そうならないように、いろいろな事業とか取り組みをやっています。」と答えました。

九鬼：平野高野町長のインタビューで、高野町が近畿で一番、消滅可能性自治体と言われたときに、町長は、「20年後に、ああ言われたけども見返してやるまちにしたい」と言っていました。

町長：そのとおりです。高野町はなくならない町だと思いますが、紀美野町もあちこちで、町おこし活動が熱心です。それを応援する地域おこし協力隊員も来てくれています。卒隊後この町に住んで、起業される方も多くいるというのは、「本当にいいなあ」と思っています。自伐型林業の地域おこし協力隊の方も、紀美野で家を購入され、夫婦で住まわれている方もいます。このような事業により町の人口が少しでも増えてくれればと思っています。

紀美野町に魅力があるから移住されるものだと思っています。子育て支援県下一を目指しているということを、県内外へもっと発信して、紀美野に関心を持っていただき、紀美野町へ移住し、子育てをしたいと思ってもらえればと考えています。

九鬼：子育て支援の水準は県下でも上位の方なのですか。

町長：私は、県下一だと思っています。

大前：子育て支援策も、制度的なお金の部分だけでなくて、相談や支援のクオリティも問われますよね。

町長：制度的なものをハードとすれば、ソフト的なもの、相談業務や保育士さんの業務の質を向上させるのが大事なので、職員にお願いしているところです。

九鬼：移住者は、紀美野の魅力で来られるのですが、地元の子どもが大学へ行って都会で就職することもあると思うのです。Ｕターンで帰るというのはどうなのですか。

町長：Ｕターンで帰ってきてもらうためにいろいろ施策もやっています。Ｕターン者などの紀美野町への移住者には３万円の奨励金も出す。今年度20歳を迎える方には二十歳の贈り物ということで、ふるさと産品を送り、ふるさとを忘れないようにしてもらう取り組をしています。子育て支援の最終に、大学の奨学金の返還補助を、紀美野町へ帰ってくる条件で行っています。奨学金を借りて大学に行き、卒業後紀美野に帰り、家から、町内外へ勤められる方にも奨学金返済に対し補助します。地元に帰るきっかけになれば良いと考えています。

大前：最後に町長から紀美野町を、こんなまちにしていきたいというようなことがありましたらお願いしたいのですが。

町長：繰り返しになりますが小さい町ですが、まちが元気で、活気があって、町民が笑顔でキラリと光るようなまちを目指したいですね。

大前：お忙しい中、紀美野町の魅力や施策を聞かせていただきました。本日はありがとうございました。

かつらぎ町新城

山村留学の歴史から、新たな地域振興を「新城BASE」を拠点に模索する。

「新城BASE」代表　戸田真寿さん

かつらぎ町新城地区で、移住された方が地元の農作物を使った土日祝日限定の倉庫カフェ「新城ＢＡＳＥ」をオープンしたと聞いて、７月６日に阪辻、大前でお話を聞きに行きました。

阪辻：「新城ＢＡＳＥ」代表の戸田真寿さんに色々お話を聞かせていただきたいと思って来ました。プロフィールから聞かせていただければありがたいのですが。

大阪から移住し農業を始めました。

戸田：僕は、大阪の天神橋出身で、中華料理店の息子です。大阪で知り合った奥さんと7年前に奥さんの実家の阪南市に移住し、お寿司屋で働いていました。

お寿司屋の社長が船を持っていて、僕も釣りが大好きで、船を借りて釣りに行っていました。たまたま防波堤で釣っていた人を、船の釣りに誘い仲良くなったのです。その人が有田川町で山椒を作る農家の人で、農業の話をする中で、地方移住とか農業に興味が出て来て、気がついたら「定住サポートセンター」を通じてかつらぎ町に「明日いきます」と連絡していました。

とりあえず、阪南市から車で1時間の橋本市、かつらぎ町か高野町あたりに住みたいと、かつらぎ町はこども園も新しくなり、交通の便も良くて、ほのぼのとした所だと、最初は四郷地区に住もうとしたのですが、水道の分担金だけで１００万円近くかかり断念（今は、25万円になっています）。天野地区には空き家がなく、この新城地区で、区長さんに挨拶した途端にトマトを口に入れられたのです。僕はトマト嫌いでしたが、なんでこんな美味しいトマトが採れるのかと、横の川を見てもすごく水が綺麗で、あまごとかが泳いでいる。空き家も補助金で改装し、移住しました。移住後2人子どもが出来、男の子が3人います。

２人目が出来た頃に新規就農して6年目になります。最初はきゅうり栽培だけでしたが、柿や米と栽培品目も増やして、今は2haぐらい作っています。ハウスも自分で建てました。ＪＡの青年部に入り、農業委員もしています。

そうした中で、ＪＡの施設だったこの建物が空き家になって、取り壊しの話が出ていて、僕は倉庫を持っていなかったので、お願いして貸してもらいました。

「新城ＢＡＳＥ」を地域の拠点に整備しました。

ここの事務室をうまく使えないかと、一緒にやっている仲間と「所ジョージさんの世田谷ベース」みたいな感じで、「新城ＢＡＳＥ」として農家の秘密基地みたいに改装して、地域の人とかが自由に居られる場所を作ろうと、クラウドファンディングに取り組みました。

その取り組みを役場で相談したのですが、その時にかつらぎ町長から、「過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業」をやったらと紹介されて、国や県の補助を受けて２，０００万円程の事業になりました。

どういうコンセプトにするかというと、ここで、農産物を育て、お客さんの口に入るまで、全部面倒を見ていけるような場所にしていきたいと、草刈り機やドローンでの請負作業をするとともに、地域の野菜やお米を「新城ＢＡＳＥ」で調理して提供する。また、店の裏でもグランピングして宿泊してもらう事で、地域の関係人口を増やしていく。「新城ＢＡＳＥ」はお店兼直売所としてこの４月７日にオープンしました。

山村留学で小学校を守り、移住者に、温かい地域

阪辻：「新城ＢＡＳＥ」誕生の経緯まで聞かせていただきました。この新城地区について、

「新城BASE」代表兼シェフの戸田さん

土日祝日限定のカフェレストラン「新城 BASE」

お話いただきたいのですが。

戸田：実は、山村留学というのが長野とか関東の方で行われていて、西日本ではここが初めてだったのですが。新城小学校（２０１２年廃校）が過疎化で１９８１年には児童数は５人と廃校の危機に、そこで区長さんが発案して１９８２年に地区の住民が里親となる山村留学に取り組み12人の留学生を受け入れ、当時ＮＨＫとか新聞でも大々的に取り上げられたようです。多い時では多分30～40人の留学生が居て30年余の歴史があります。そんな歴史もあって、ここで住んでいる人の半数近くは、移住者だと思います。だから、移住者がこの地域を作ってきた。よそ者に対してすごく暖かい地域です。

阪辻：地区の人口はどのくらいですか。そのうち移住者の割合はどうですか。

戸田：人口は１１０人ぐらい。たぶん移住者は３分の１くらいかな。新城小学校の跡地が地域交流センターになっていて、水とみどりの美術館「すぎのこ」があります。今の区長さんが元高校の美術の先生で独立美術協会会員の大作を常時展示しています。

大前：新城移住協議会というのはどんな活動をしているのですか。

戸田：移住希望者と地区との橋渡しを行っています。役員は区の役員と兼務で、20人程います新城では区の総会には30人以上集まるほど地域の団結があります。

「新城ＢＡＳＥ」と地域の現状とこれからの課題

阪辻：「新城ＢＡＳＥ」を中心とした関係づくりでご苦労されていることがあれば。

戸田：お店に来て帰ってもらうだけじゃ関係人口づくりにはならない。地域で支援してくれる組織は、加工部会やハドメイドクラブに所属している女性が10人ぐらいいます。地域や地元の人と関るイベントを作っていかないといけないのですが、そこはちょっと苦労しています。

大前：運営主体はどうなっているのですか。

戸田：一般社団法人になっているのですが、補助金は、自治会へ来て、受け皿で任意団体を作ったのですが、任意団体では運転資金の確保などが出来なくて、一般社団法人で、融資を受けたり税務申告をします。その方が末永く運営できると考えて会社組織にしました。

阪辻：開店して３ヶ月、今の課題とかが明らかになってきたとかありますか。

戸田：始めにインフルエンサーの人に来ていただいて、ランチがすごく美味しいと言っていただいて、ランチは繁盛しています。しかし、ランチ後のカフェの時間のお客が少ない。ドリンクや魅力のあるものを提供してカフェタイムの顧客の増加を図りたい。また夏場になると食べ放題にしている地元のお米が足らなくなってくるので対応を考えています。

阪辻：こうなったら嬉しいとか、将来の夢みたいなものは。

戸田：鳥獣害もすごいし、農家も高齢になって、田んぼを手放したり、太陽光発電に変える人も出てきて農地の荒廃が進んでいます。すごく危機感を持っていて、地域の人から農作業を受けることもやりかけています。耕作放棄地がなくなり、将来も農業を続けられるだとか。安定してお金も入って来る地域に少しでもできればと思っています。

　それと、移住協議会もやっていますが、ここも空き家の関係で移住を待ってもらっている状態です。移住者を増やすことは大変なので、関係人口の広がりを作っていきたいと思っています。昨年６月２日の豪雨災害の時もボランティアの人が１００人以上来てくれました。普段からここに関係してくれている人がいて困ったときに助けに来てくれるとか、例えば、水路の草刈りで、お米５kgのお礼をするからボランティアで助けてくれないかと情報発信出来るような取り組みも考えています。

阪辻：地域に根ざして、これからの新城を支えて行こうという思いが、伝わるお話で、ぜひ頑張ってください。今日はお忙しい中ありがとうございました。

地元の農産物を使ったメニュー

第66回自治体学校 in 神奈川

公共を取り戻すことの重要性を改めて考えました

和歌山市水道労組　伊藤一三さん

7月20日（土）21日（日）に横浜市で行われた第66回自治体学校は、県下から3名が参加し、和水労の伊藤さんに感想をお聞きしました。

昨年の岡山に続いてで、分科会での報告も要請されての参加でした。分科会は⑨震災と水道事業「いのちの水を送り続ける」でした。能登震災や静岡の台風災害での断水、長崎の寒波での断水の報告のなかで、２０２１年10月の六十谷水管橋崩落とその後の報告をしました。

何度かの報告で目新しさはないのですが、水管橋崩落事故後に和歌山市は水道ビジョンの見直しを行い、今年３月新ビジョンとして発表しました。以前の水道ビジョンは、水を作る浄水場の統廃合を進め、加納浄水場１カ所に集約する計画でしたが新ビジョンでは、紀の川を渡る水管橋の複線化と紀の川北岸に新たに浄水場を建設する計画としています。事故を受けて和歌山市からも国に要望を行い、「水管橋耐震化等事業」として３分１補助事業が新設されたことも報告しました。

自治体学校では、やっぱり公共を取り戻すという所が、重要だとあらためて思いました。コロナの時や震災でも目の当たりにしましたが、地域の人の暮らしをどう支えるか、何か起きた時に、自治体が率先してやらないといけない事が、実際は職員が無かったり、財政的に厳しかったりで充分に対応できない。改めて公共性とは何度やというのは問われていると思いました。

伊藤一三さん

県下各地から⑨

「産業廃棄物発電」計画への反対運動強まる

湯浅町山田地区で「バイオマス発電所」計画が２０２１年に地元地区役員に説明されました。しかし、産業廃棄物処理施設を併設し、産業廃棄物を燃料とする計画から反対運動が強まっています。

湯浅バイオマス発電建設予定地

建設予定地は、湯浅インター東の山林で、山田小学校や県営御殿場団地、わかやま市民生協の物流配送センターの真上に、産業廃棄物を燃やす発電所と産業廃棄物を燃料として処理する施設を設置するというものです。

この山林は、地権者が無断で山林を伐採・切土を行い造成。以前から産業廃棄物の不法投棄、違法盛り土で県からも指導を受けたいわくつき土地です。

また、説明会の資料では、大阪の会社が「バイオマス発電所」を建設、稼働させる計画で、その燃料として建築廃材・廃畳・剪定枝、日量約95トンを処理し、燃やすということでした。発電規模は１９９０キロワット、給水が日量96トン、排水が48トンの二四時間稼働という計画です。ところが、よくよく計画の概要説明を見ると、産業廃棄物中間処理設置許可（粉砕・焼却）とあり、表向きは「バイオマス発電所」、内実は「産業廃棄物処理施設」の建設計画であることが分かってきました。

地元区外でも、「湯浅町産廃処理施設計画対策連絡会」（以下「連絡会」。）がつくられ、情報収集と全町的な取り組みを検討する場が設けられました。連絡会は、計画事業者から和歌山県に提出されている「産業廃棄物許可申請等に係る事前調査書」に関する公文書を取り寄せ、バイオマス発電所という計画は全くの隠れ蓑で、建築廃材や廃プラスチックを粉砕、焼却する産業廃棄物処理施設というのが、「湯浅バイオマス発電事業計画」であると確信しました。

地元山田区も産廃処理施設を、小学校や住宅に近いこの場所に建設すべきではないという意見にまとまり、６月湯浅町議会で、山田区出身の町議と共産党の町議が一般質問で町当局の姿勢を質し、町議会の総意で和歌山県知事への反対意見を提出するとなりました。

これからの取り組みとして、和歌山県に対して、産業廃棄物許可を出さないようにとする意見書を町と議会に請願する運動を起こしていきます。